

「参加したくなる」「本屋の話」



15th Anniversary (2009-24)

ナカノシマ大学2024年6月講座

大阪の本好きに伝えたい



全国から本好きを呼び寄せた定有堂書店(鳥取市)の棚(2011年10月24日撮影/堀内菜摘)



上から/定有堂書店の内観、今回の講師・三砂慶明さんが主催する「読書室」の一角、講師の三砂さんが勤務する[TSUTAYA BOOKSTORE 梅田MeRISE]

6/21 (金) 18:00~19:30

会場 **大阪府立中之島図書館** (3階多目的スペース)

受講料 **2,000円** (小学生以下1,000円) 定員 **60名**

講師 **三砂慶明** (「読書室」主宰・文筆家・『町の本屋という物語～定有堂書店の43年』編者)

主催 大阪府立中之島図書館 (指定管理者ShoPro・長谷工・TRC共同事業体)

企画協力 ナカノシマ大学事務局 (株式会社140B)

本屋は「参加」してこそおもしろい! 執筆・編集し、行動する書店員の肉声を

梅田の書店で働く三砂慶明さんは、私たちの中にある「書店員」のイメージを軽々と飛び越える人です。読書会を主宰し、読書についての著書もあります。その三砂さんが鳥取の名物書店に通い、店主の言葉を集めてこの春刊行された『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』(作品社)が早くも3刷となり、読書界で静かなブームになっています。今回のナカノシマ大学では、三砂さんに「梅田ではたらく書店員」としてではなく「本好き本屋好き」の立場から、これからの本屋の可能性や、大阪の「参加したくなる書店」のお話をたっぷり伺います。

〈講師からのメッセージ〉書店で働きながらPOPを書いていたら、ブックガイドをすることになり、気がついたら「本屋の本」を作っていました。それにあたって本屋の歴史を調べてみると……もともと「本屋」という名前の由来は、慶長14年(1609)に京都室町通近衛町に書店を開いた「本屋新七」によるもので、書物商人新七の屋号でした。この屋号は新七以降、多くの同業者に使われるようになり、その後普通名詞に転化して、現在も書店や出版社の愛称が「本屋さん」として一般に使われています。以来、私は本屋というのは「人」で、書店というのは「空間」と使われています。

今回のナカノシマ大学では、なぜ私たちの人生には本が必要なのか? 本屋とは何か? そして本屋に「参加」するための方法を、「本屋の聖地」鳥取の定有堂書店を例にお話しさせていただきます。大阪には魅力的な本屋が数多く存在します。独断と偏見によるとっておきの大阪の本屋をご案内いたします。ぜひお楽しみに!!

みさご・よしあき 「読書室」主宰。1982年兵庫県生まれ。株式会社工作社などを経て、[梅田 蔦屋書店]の立ち上げから参加。現在は[TSUTAYA BOOKSTORE 梅田MeRISE]勤務。著書に「千年の読書——人生を変える本との出会い」(誠文堂新光社)、編著書に「本屋という仕事」(世界思想社)、奈良敏行著『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』(作品社)がある。



講師の三砂慶明さん (撮影/濱崎崇)



※当日は会場で、『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』などを販売します (税込2,420円)

→受講申込は、こちらのQRコードからナカノシマ大学のWEBで受付します。

※次回は7月18日(木)18時予定……「歴史都市・堺で18世紀に生まれた幻の怪談本『沙界怪談実記』を読み解く(仮)」
講師=陸奥 賢(観光家、commons・デザイナー)

